

或る鉱夫

学校番号:039 世田谷学園高等学校

もう帰りたい。外に出たい。重たい。暑い。暗い。辞めたい。
何度も、何度もそう思った。でも、どうしても、譲れないプライドがある。

ある山に、惚れた男がいた。

この山と契を交わしてから25年弱、俺のすべてをここに費やしてきた。そのせいだろうか、最近、娘が口を利いてくれなくなった。高校にも慣れてきた頃、当たり前だろうか。先週のことであった。

「これ、来週授業参観あるんだけど」

「来週俺は仕事なんだ。母さんに言いなさい」

「最初からそのつもりだよ。勘違いすんな」

娘の目に涙が込み上げていることくらい、俺にも分かった。だけど、それでも、山に入らなきゃいけないんだ。採掘量の減少で貨物列車も一日一往復に減便された。それでも、希望はある。いや、希望がなきゃだめだ。山を信じ、愛す。それが坑夫の性じゃないか。

娘よ、こんな親父で申し訳ない。後悔と謝罪を記す。

「ママ、これなに？」

「これ、おじいちゃんの日記よ。ママの宝物なの」